



B型肝炎、C型肝炎

『沈黙の臓器』を大事に!

**血液を介して感染して
肝臓がんへの危険性も**

ウイルスが引き起こす肝炎。B型肝炎とC型肝炎は知られていますが、実は肝炎ウイルスにはA型、D型、E型、F型もあります。A型肝炎は、A型肝炎ウイルスに汚染された生ガキを食べた時などに発症し、B型、C型以外は東南アジアに多いウイルスです。

B型・C型肝炎ウイルスは、どちらも肝臓の細胞に感染し、肝臓に炎症を起こして肝細胞を徐々に壊していきます。慢性の病気で初期症状はほとんどありませんが、放置すると肝硬変や肝がんに行き着くリスクが非常に高まります。B型肝炎とC型肝炎を比較するとC型肝炎の方が肝臓がんへ進行しやすいの

で、より警戒しなければなりません。

B型肝炎もC型肝炎も、基本的に血液を介してうつります。空気感染や日常的な接触からの感染を心配する必要はありません。普通の生活を送っていれば、かからない病気と言えるでしょう。

昔は血液の検査・管理が徹底していなかったため、輸血から感染する問題がありました。しかし肝炎ウイルスの検出試薬が開発されてからは、輸血が原因の発症はほとんどないようです。

また以前は、注射針の使いまわしによっても感染したのですが、これも今はなくなりました。ただ、覚せい剤使用や入れ墨による感染が問題となっており、入れ墨は体に傷をつけますから、抜く針を毎回滅菌消毒しなければなりません。そしてB型肝炎に関しては、母子間での出産時感染や性交渉も原因となつていきます(C型では稀です)。

**症状が出ないのが落とし穴
早期発見を心掛けよう**

臓器や血液中にウイルスを所持しているながら、肝炎などの病気が発症していない人のことを医学用語で「キャリア」と言います。実際にキャリアの状態では、健診での肝機能数値にまったく異常が

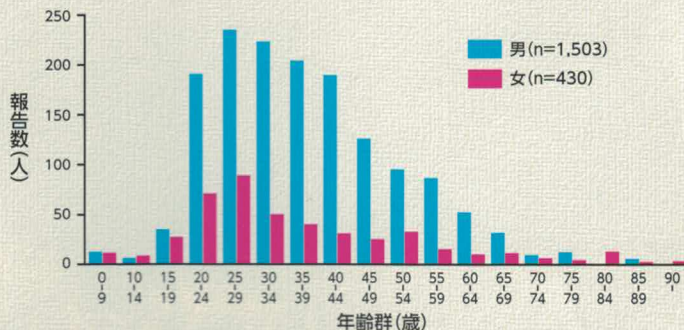
ない人もいます。そもそも肝臓は非常に予備力が高い臓器(予備力とは、機能が低下しても、平常の生命活動を営むのに必要な能力を指します)。少しくらいウイルスによる炎症を起こしても、自覚症状がほとんどありません。肝臓は『沈黙の臓器』と呼ばれるぐらいなので、知らない間に肝炎にかかって、肝硬変まで進行する方もいるのです。

火事に例えるとすれば、燃え上がっている状態が肝炎で、ほとんど燃え尽きてしまい、チロチロと小さな炎だけしか残っていない状態が肝硬変です。肝炎という炎を鎮火させるためには薬を使って治療することになります。

もちろんお酒は大敵なのですが、キャリアの状態だと自覚症状がないため、飲み続けても体の異変に気づかず、いつの間にか肝炎にかかっている方もいます。やはり検査での早期発見が肝心です。

私がご紹介を受けた患者さんで、持続感染状態からC型肝炎が自然治癒されたという方がいました。本人の免疫力で治ったとしか考えられないのですが、放置した場合、慢性肝炎、肝硬変、肝がんとなり得る命に関わる病気であるので、もし診断を受けた際には、必ず定期的に検査を受けてください。

**急性B型肝炎患者の
年齢別・男女別・発生状況**
※2006年～2015年



国立感染症研究所「感染症発生動向調査(2016年5月27日現在報告数)」



監修 浅海直 あさうみすなお
(医療法人社団平成医会 産業医)

1993年千葉大学医学部卒。2007年12月まで松戸市立福祉医療センター東松戸病院(内科副部長)、2008年1月より板橋区役所前診療所に勤務。専門分野は糖尿病、脂質異常症、甲状腺疾患等の代謝・内分泌疾患および老年医学。